

## 梅の木の下ドラマ

### 春を告げるキノコ、春を謳歌するキノコ、春に別れを告げるキノコ

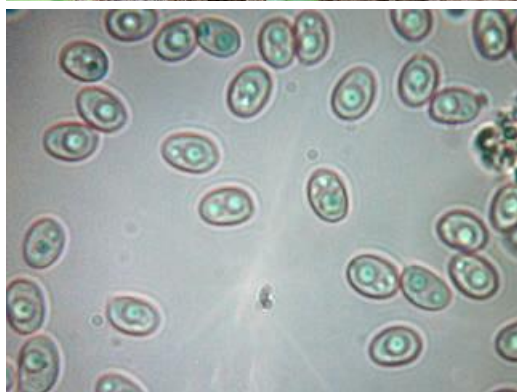
山本 充弘

緑が覆いかぶさるほどの細い道は、かつては部落の生活道路だった。しかし、新しい道がすぐ近くにできたため、今では一日に数えるほどの人しか通らない。この道沿いに200坪にも満たない放置された農地があり、その一角に老成した梅の木が4本立っている。地主は遠隔地に住んでいるため、梅の実には自由に採取していいと私に言ってくれている。でも、私は梅の実よりも梅の木の下に大きな興味を寄せている。

#### 第1幕 春を告げるキノコ

水仙や菜の花が1月から咲きみだれる南房総も、水が温んで春だなーと実感するのはやはり3月。桜の便りもちろはら聞かれる頃、地温も上がってきて小さな茶色いキノコが顔をだす。チャムクエタケモドキだ。このキノコは、取り立てて梅の木の下に生える訳ではないらしい。キノコの少ないこの時期、姿形や色(茶色が濃いけれど)もハルシメジにちょっと似ているといえなくもない。このキノコを梅の木の下で見つければ、おや、もうハルシメジが顔を出したのかと思ってしまふ。しかし、このキノコは、チャヒラタケ科チャヒラタケ属で、顕微鏡で胞子を見ればハルシメジでないことが頷ける。食べられるのかどうかについては、はっきりしないキノコのようなだが、いずれにしろ食用には向かないらしい。人によっては、このキノコを「春を告げるキノコ」と呼んでいる。梅の花の咲く

ころにでも見つければ春を告げるキノコのように感じられるが、3月下旬ではちょっと寝過ごした感がある。



チャムクエタケモドキ (2013.3.31)

#### 第2幕 春を謳歌するキノコ

桜も散って春真っ盛りともなれば、待ちに待ったハルシメジが顔を出す。何か月も野生のキノコの味から遠ざかっていたキノコファンは、この時を待っている。ハルシメジは、個人的に春のおいしいキノコの筆頭である

と思っている。イッポンシメジ科イッポンシメジ属のハルシメジは、シメジモドキが本名らしいが、大体どこでもハルシメジでとおっている。胞子が特有の多角形をしており、イッポンシメジ科の仲間のキノコだということが顕微鏡で胞子を観察すれば一目瞭然である。



ハルシメジ (2013. 4. 23)

この時期、ハルシメジに似たキノコもいくつかあるらしい。当初、私はこの梅の木の近くの畑（我が家で借りている畑）で茶色いキノコを見つけ、ハルシメジと信じて食べていた。翌年、このキノコの胞子を顕微鏡観察して、ハルシメジではないことが判明した。では何かというと、いろいろ調べてやっとツバナシフミヅキタケという名にたどり着いた。ネット情報では、食か毒かで意見が分れているが、その後もこのキノコを見つけると採って食べており、これまであたったことはない。

ちなみにツバナシフミヅキタケは、オキナタケ科フミヅキタケ属である。

### 第3幕 春に別れを告げるキノコ

ハルシメジを大事に食べて、それが終わりに近づくと、よく似たキノコが梅の木の下に顔を出す。柄の根元部分がちょっと膨らんでいるのを見落とすとハルシメジと混同してしまう。これがウメウスフジフウセンタケで、梅の木に関係するフウセンタケ科フウセンタケ属のキノコである。このキノコが出るとハルシメジも終わりですよとされている。成菌は笠もヒダも茶色でハルシメジの育ちすぎのように見えるが、幼菌は、名の通りヒダがウスフジ色をしており、フウセンタケ属特有の蜘蛛の巣状の膜も見られる。また、胞子はフウセンタケ属によく見られる茶色を帯びた楕円形をしている。食べられるのかどうかは、ハルシメジと混同しやすいだけに気になるところだが、ネット情報では食べられないだろうという意見が大勢を占めている。



ウメウスフジフウセンタケ (2013. 5. 13)

#### 第4幕 顕微鏡による孢子観察の効用

これまで顕微鏡による孢子観察の情報をいろいろ持ち出したが、孢子の形によって種を同定することはほとんどの場合困難であると言っていい。顕微鏡観察のいいところは、そのキノコの孢子が特徴的な形や大きさをしている場合に〇〇科あるいは〇〇属でないという消去法に、また、逆に××科あるいは××属の仲間であるらしいという見当をつけられることである。例えば、ベニタケ科の仲間は全て棘の生えた球形をしており、メルツァー液をつければアミロイド反応（黒く着色する）を示す。通常ベニタケ科は、見た目でもほとんどの場合わかるが、中には他の科のキノコと見間違いそうなものもある。そういう時には威力を発揮する。前に述べたように、ハルシメジの所属するイッポンシメジ科も多角形の孢子を持っているので、グループの判別に大変役立つ。一方、属レベルで典型的な孢子を持っているものもある。キシメジ科のキツネタケ属は、同じ科のほかの属と全く異なるベニタケ科に似た孢子形態をしている。キノコに名前が付けられるときには、ほとんどの場合、外見的特徴をとらえて名づけられると思うが、中には孢子の形態に由来する名前のキノコもある。フウセンタケ科アセタケ属のコブアセタケは、孢子にコブがあるアセタケである。外見でアセタケ属までたどり着けば、コブアセタケかどうかという判定が可能になる。ここまで述べてきたように、顕微鏡による孢子観察は、種の同定について直接的に期待せず、外堀を埋める戦略で対応するのが好ましいという気持ちになっている。

#### 第5幕 野生のキノコを食べるとは

梅の木の下でキノコの写真を撮っている、隣の部落らしい農家のおばさんが通りすがりに声をかけてきた。「何をしているの?」「キノコの写真を撮っている」「食べられる

キノコ?」「ハルシメジとって梅の木の下に生えるとてもおいしいキノコです」「じゃ、私も家の梅の木の下を探してみようかしら」。彼女はその後どうしたんだろうか。どの梅の木の下にも生えるわけではないが、仮に生えていたとしても、知らない野生のキノコを食べるには相当の勇気がいる。我が家でも、妻は店で売っている栽培キノコはおいしそうに食べるのに、私が採ってきたキノコには一切箸をつけようとしない。「もし、料理屋やペンションなどで出されたらどうする?」と聞くと、「それは信じられるので食べる」と答えが返ってくる。私は、チチアワタケを食べて、ひどい下痢に襲われたことがある。このことを知っている妻は、私の採ってくるキノコを全く信じていない。キノコみたいにこんなにも食で愛されながら、こんなにも怖がられる食べ物も珍しい。他にそんな食べ物はあるのだろうか、と思いつめぐらして、ちょっと似ているのがフグかなー、と浮かんだところで、千葉菌類談話会の重要な会員でもあるフグ料理屋「伊豆」のご主人の顔が浮かんだ。

#### 第6幕 終章

春を告げるチャムクエタケモドキ、今は春なのだとして強烈に自己主張しているハルシメジ、そして春に別れを告げるウメウスフジフウセンタケ、どれも地味なキノコではあるが、梅の木の下に繰り広げられるドラマを感じる。温暖化の影響なのか、最近はキノコの世界も季節感が狂っていると感じることが多い。2013年の春のドラマは、ウメウスフジフウセンタケの後にまたハルシメジが顔を出した。もうお前の出番は終わったのに、と言いながらおいしくいただいた。世界広しといえども私たち日本人ほど四季を愛でる国民もいない。キノコの世界にもしっかりと四季が残ってくれる地球であってくださるようにと願うばかりである。